

黒人文学 アフリカからアメリカへ

北村崇郎



NHKボックス

158

北村崇郎 (きたむら・たかお)

1927年 岐阜県関市に生まる

1957年 B. A. in English, Austin College

1962年 国際基督教大学教育学修士

1966年 M. A. in American Literature, Howard University

1970年 Fellow, American Council of Learned Societies

1971年 Visiting Professor in American Studies, Carleton College

現在 中央大学助教授

著書 『ブルースの彼方へ——黒人文学とその背景』(1969年)

訳書 ラングストン・ヒューズ『自由のための戦列——NAACPの歴史』
(1970年)

現住所 東京都大田区中馬込1-7-10-302

NHKブックス 158

検印廃止

黒人文学 アフリカからアメリカへ 定価 400円

昭和47年4月25日 第1刷発行

著者 北村崇郎

発行者 浅沼博

印刷 三秀舎

製本 田中製本

装幀 柄折久美子

発行所 日本放送出版協会

東京都千代田区内幸町 2-1-18

郵便番号 100 振替東京 49701

1398-001158-6023

落丁本・乱丁本はお取替いたします

黒人文学

アフリカからアメリカへ

北村崇郎



NHKブックス

158

© 1972 Takao Kitamura

黒人文学——アフリカからアメリカへ・目次

第一章 現代アメリカと黒人文学……………七

一 ある教室風景——黒人学生と白人教師 9

二 黒人芸術論(ブラック・アート) 16

三 黒人文学の普遍性 23

第二章 民族的文化遺産……………三七

一 アフリカの文化遺産 39

二 アメリカ文明への同化と自立 51

第三章 黒人文学の形成……………四

一 恵まれた黒人作家たち 67

二 模倣と独創 79

三 奴隷体験記 93

第四章 黒人の民俗音楽……………一〇五

一 宗教歌 107

二 ブルース 124

第五章 フォークロアとアメリカカ文学……………二七

一 フォークロア（民間伝承）の背景 141

二 フォークロアの種類と文化的伝統 150

三 フォークロアから文学へ 157

第六章 自立する黒人文化……………二七

三つの前置き 173

第一期（二七六〇—一八三〇） 第二期（一八三〇—一八六五）

第三期（一八六五—一九一〇） 第四期（一九一〇—一九三〇）

第五期（一九三〇—一九五四） 第六期（一九五四—現在）

あとがき 208

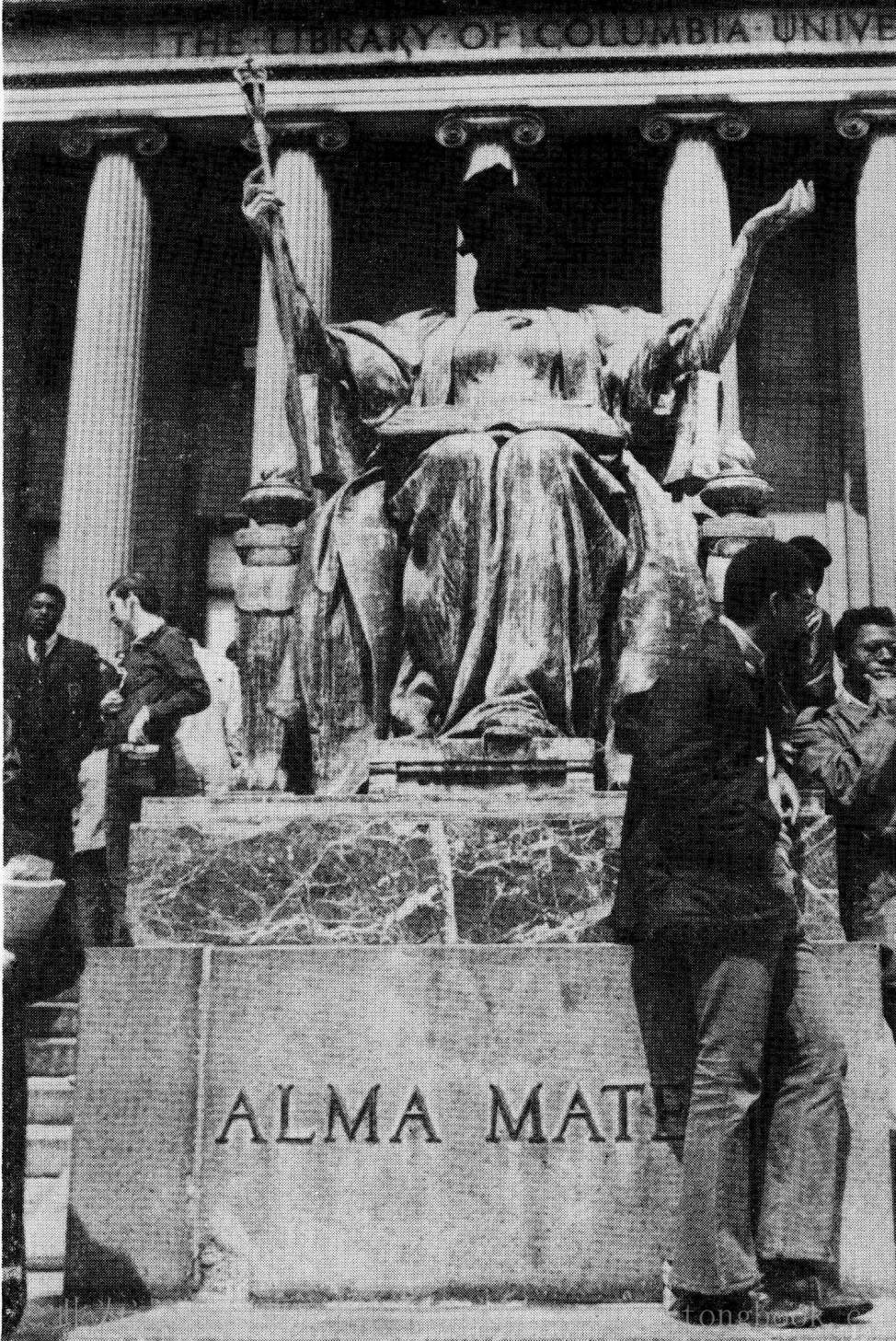
黒人文学年表

For Sterling A. Brown,
Arthur P. Davis,
and
The Late Ulysses Lee, Jr.

第一章 現代アメリカと黒人文学

扉裏・コロンビア大学の図書館前、母校の象徴であるアルマ・マター（W.P.提供）の像に黒衣をかぶせて抗議する黒人学生たち

THE LIBRARY OF COLUMBIA UNIV



ALMA MATER

一 ある教室風景——黒人学生と白人教師

ぎっしり本がならんだ壁を背にして若い白人の大学教授は、ゆったりと回転椅子に腰をおろして大きな机の前におどおどしながら腰をかけている黒人学生に、眼鏡ごしにほほえみをなげかけていた。このやさしそうな教授は、左手でほほの髭をなでながら口をひらいて黒人学生に語りかけた。

「ねえ、君。君はいま敵のまっただ中にいるんだよ。敵に勝つためにはね、君。まず敵をよく知ることだよ。よく知らなきゃ、絶対に勝てないんだ。そのためにはね、一生懸命、勉強することが第一さ。わかるかい君。君の敵は白人なんだよ。」

この黒人学生はシカゴのゲットーにある高校を割にいい成績で卒業して、カールトン・カレッジから黒人学生のために出されている奨学金を獲得して、この雪につつまれたカールトンへきて勉強しているのであった。彼は学生のほとんどが黒人であるシカゴの高校ではいい成績であったが、彼のうけた初等教育、中等教育、そして高校教育は全米の水準から考えると非常にひくく、全米から優秀な学生があつまっているカールトンでは、白人学生と互角に学問研究をするのには、相当な無理があつたようであつた。この大学での成績は、まことにかんばしくなかつたので、担当の教授に呼び出され、この研究室へおそるおそるやってきたのであつた。

私はちょうどその時、客員教授としてカールトンで黒人文学の講義をしていた。この黒人学生は私のクラスにも席をおいていたが、成績は悪かったので、彼をどう扱うか私はとても困っていた。そのうえ、この黒人学生は非常に急進的で、白人全体を敵にみるような発言をしばしばクラスでも行なっていた。この白人社会に対するはげしい怒りが原因なのか、彼の過去の生活環境が現在の彼の成績に影響しているのか、学生の大多数が白人である有名校から、黒人学生に与えられる奨学金をもらってカールトンへきて、白人社会に住んでいることから発生する心理的圧迫にたえられないので成績がわるいのか、それはよくわからない。

ここで問題にすることは、この黒人学生がおかれている状態を生み出した原因と結果の因果関係ではない。それよりも、注目したいことは、リベラルと自他ともにゆるす白人教授が過激派と目される成績の悪い黒人学生にむかって「おまえは敵中にあるんだぞ、しっかりやれ」と説教している方法である。ちょうど第二次大戦中に日本の政府当局はわれわれ国民にむかって「鬼畜米英」の宣伝をさかんにやって、日本人の敵が一心を扇動した。「敵中にあるんだぞ」という説教方法とわれわれの経験した「鬼畜米英」の扇動と一体どこが違うのか。よく考えてみると、この二つの説得方法は本質的に同じ問題を含んでいるのではないかと疑いを持つ。教育うんぬんを口にするものが、ある種の間人集団または個人に、自己の属している人間集団以外の人間集団や個人に対するにくしみを植えつけたり、他人を侮辱する気持をいだかせることは、人間性の中にある善をまったく否定する第一歩になるのではないか。そして、この場合には黒人から白人に対するにくしみや侮辱感が問題になるが、それを「お前は敵中にあるのだぞ」と白人教授からいわれて、意識する、しないにか

かわらず助長させられたこの黒人学生が受ける心理的圧迫はどんなに大きな影響を彼の人格形成に及ぼすことであろうか。彼は信頼とか、寛容とか愛とか友情などの人間性の美しさへの理解を失って、永遠に恐怖、不信、怒り、にくしみ・そして永遠の屈辱の中に生きていくことになりはしないか。人が人であるかぎり、人間はだれでも「永遠の屈辱」の中には生きてはいかれない。もし、強制的にその中に生きのびなければならぬとしたら、その人は人間以下(sub-human)の存在になつてしまふとしか考えられない。

黒人にとつてもっとも重要なことはこの「人間以下の存在」から「……以下の(sub-……)……」という文字をとりさることではないか。このことをジェームス・ボールドウィンはつぎのように説明している。

「この国(アメリカ合衆国)でニグロとして生きるとは、そのうえ、(そのことに関して)比較的にも意識しているということは、四六時中ほとんど怒りからいられているということです。だから、われわれの第一の問題は、それがわれわれ自身を破滅させないように、その怒りをどうやって抑制するかということなのです。……この怒りのある部分は……われわれ個人にふりかかっていることだけではなくて、極端に想像もつかない犯罪的な無関心さ、つまり、このアメリカに住む大抵の白人たちが示す無関心さと無知に直面するときに、われわれすべての日常生活に絶えず起こっていることなのです……」

しかし、一九六〇年代からはげしくなった公民権運動、黒人たちの改革運動、ベトナム戦争反対運動や平和運動、それに第三世界との共通意識をもとうという運動など、黒人の過激派や穏健派、

それに、白人のリベラルな人たちや良心的、道徳的に制度や意識の改革を求める人たちなどが、いりみだれて運動を展開し、現実には社会が少しずつ変わりつつある現在のアメリカでは、いちばん最後までとり残されてきた黒人問題を中心とした人種問題に、だれも無関心ではいられない。大統領をはじめとする政府の高官から、田舎の高校生にいたるまで改めなければならぬと考えているといつてさしつかえないであろう。教会の日曜学校のカリキュラムから大学の教育計画まで練りなおされている現状である。大学という名のつくほとんどの大学は、自己資金をはじめ、各種の財団や政府からの莫大な経済援助を受けいれて、奨学金を設立し、黒人学生を受けいれている。私が黒人文学を講義していたミネソタ州のカールトンには、全米をめぐって各地の黒人学生の面接を行い、いい学生を選んで大学までつれてくる黒人の募集係が専門にやとわれていたし、彼の部局には、数名の黒人が働いていた。一九七一年のはじめには、カールトンの一、四〇〇名の総学生数に対し、四〇名の黒人学生が登録していた。これをいそいで一〇〇名まで増やし、そして、計画では全学生数の一〇パーセントまで黒人学生を増加させるとのことであった。コンピュータで計算するようにある比率だけ黒人の学生数を増やすというアメリカ的な考え方は、われわれの想像以上に多くの問題をひき起こしているが、全米の大学がそれぞれ黒人の学生数を急速に増加させていることも事実であり、これもまた、われわれの想像以上の努力と金銭がそのためにつきこまれていると考えてまず間違いはない。

では、こんな変わりつつあるアメリカ社会の先頭にたつて、改革のために最大の努力をつくしていると考えられているリベラル派の教授が、できのわるい黒人学生に「お前は敵中にあるのだぞ」

と説教をするような、みじめな方向へなぜおしやられてしまうのであるか。そのひとつの大きな原因は、白人で中産階級以上に属するアメリカ人のほとんどが、そして、特にインテリでリベラルと考えられる人たちのほとんどが、意識する、しないにかかわらず、過去三五〇年にわたって黒人たちが奴隷または、奴隷に近い状態においてきたことに対して、心の奥深く、罪の意識をやどしている、この罪の意識の代償としていろんなことをやろうとしているからであろう。

長くアメリカの社会機構の下づみにされてきた黒人たちは、南部や各都市のゲットーで白人校よりはるかに劣る教育施設、教師たちによって、いわゆる人種差別の教育を強制的に受けさせられてきた。この黒人たちが、一九七〇年代の現在、たとえ選ばれてアメリカでも有数の有名校であるオペリンやカールトンへ入学して、全米各地からきている優秀な白人学生たちと肩をならべると学力で劣っている、いっこうに不思議ではない。黒人学生たちの受けた六・三・三制教育はおざなりな教育でアメリカの社会制度が彼らにおしつけた残酷な「むち打ち」であったとリベラルな白人教授たちは考えていたようであった。そのうえ、いわゆる有名な白人校へやってきた黒人学生に、学力が低いからとの理由で単位を与えない補習クラスをつくることは、彼らに白人側からの心理的圧迫をますます与えることになる。優秀な白人学生と劣等な黒人学生を各クラスで平等に扱って、黒人学生の多くを落第させたならば、「高校時代に与えた「むち打ち」以上の新しいかたちの残酷な「むち打ち」を与えることになるのだ。だから、気の毒な黒人学生たちを、もうこれ以上、冷酷に扱うことはできないのだ。こんな考え方でリベラルな教授たちに扱われるので、多くの黒人学生たちは相当成績がわるくても及第するということになっていたようであった。私はカールトンへ着任する

まえの九ヶ月をアメリカ学術協会の研究員としてペンシルヴァニア大学でフォークロアの研究と南部の実地調査のためにすごしたために二万五千マイルのドライブ旅行をしたので、行くさきさきで聞いてみると、このことは多くの大学に共通した問題として存在していたように見うけられた。ここでは、はたしてアメリカの大学が大学の機能を果たしていると言えるのであろうか。

前回の在米生活では、四年以上にわたってワシントンの黒人ゲットーに住み、その間、何度もラングストン・ヒューズをたずねてハーレムに行ったことのある私は、いろんな階級の黒人たちと親しくなる機会に恵まれた。ハーワードの教授たちをはじめ、いわゆるインテリ階級の黒人たちの友人も相当数もっている。庶民階級に属する知人はもつと沢山いる。特に昨年アメリカ旅行では南部各地、東部の教都市で過激派とよばれる黒人青年たちとも話しあう機会にも恵まれた。主張はちがいが、受けた教育に差はあっても、私の話しあった黒人たちに一貫していたことは「われわれを社会的には全く平等に扱ってくれ。ただし、個人の生活にはいっさい干渉しないでくれ」という、簡単な、しかも、アメリカ人ならばだれにも通用するごく普通の常識であった。

ところが、昨年、私がアメリカで経験したことは、もつとも進歩的と自他ともにゆるし、そのうえ、人種問題を解決するために最大の努力をしていると自負しているリベラルな白人たちが、敵がい心をあおりたてる教育をしたり、「気の毒な」黒人たちに特別に考慮を与えるパタナリズムの考え方で黒人学生に接しているのを改めて認識させられたことであつた。

それに人間はだれでも、相手に何らかのスキを見出して、「組みやすし」と思えば相手の心のスキや弱点につきからつきへど食込んでいくのが普通のようなだ。現実に奨学金をもらっていて、来年

度もそれを引き続いてもらえるかどうかは、いくつAやBをとるかということにかかっていると、どうであろうか。弱みをみせているリベラルな教授のふところへとび込んで、さらに、もっと弱いところをつついてみたくなるのが、ごく普通の人間であるわれわれが世界中どこでも、そして、いつの世にでもやることではなからうか。

まして、六〇年代後半からは集団で圧力をかけることが流行している。「アメリカ文明の最下層にうごめいているのは誰だ」「誰がその社会制度をきずいたのだ」「おれたちは、自ら、選んでアメリカから自由の国アメリカへ移民したのではないぞ」「一体、どこのだれが、おれたちを奴隷船にのせてアメリカ大陸へ運び、そのうえ、奴隷として売りとばしたのだ」などと、三人、四人の黒人が声をはりあげると、クラスに何人白人がいようと、クラスを支配するのは、身動きもできないような圧迫感のこもった沈黙のみであった。そして白人ばかりか、黒人でも急進派ではない学生たちも、いつさい無言であった。こんな緊張した場面になったのは一〇週間カールトンで講義していたあいだ、一度や二度のことではなかった。集団でおられたむように発言してくる、さしせまったあの圧迫感、黄色人種のこの私にもひしひしと感じられたし、私が直観的に受けた印象は、日本で経験した過激派学生運動にまきこまれたときに受けた圧迫感とまるで同じだということであった。むろん、問題は比べものにならぬほどアメリカの直面している事態が深刻であることは知っていたが、あの深刻さは経験しないと理解できないかも知れない。

急進派である黒人学生が主張したことは「資本主義社会機構が新しい奴隷制を黒人たちに強いている」「白人植民地主義が全有色人を搾取している」「だから、われわれはその制度を破壊しなければ